平成２８年度第３回瀬戸市総合教育会議　議事録

▽日　時

平成２９年２月２２日（水）　午後２時から午後２時５０分まで

▽場　所

瀬戸市役所４階　庁議室

▽出席者（順不同、敬称略）

【瀬戸市総合教育会議構成員】

瀬戸市長　伊藤保徳

教育委員会教育長　深見和博

教育長職務代理者　佐野嘉崇

教育委員会委員　加藤髙明、加藤智子、林みゆき、寺田康孝、二宮あづさ

【事務局等】

副市長　青山一郎

経営戦略部　次長兼経営戦略室長　高田佳伸

経営戦略室　室長補佐　大岩三明、主査　杉江圭司

教育部　部長　加藤都志雄

学校教育課　課長　鈴木勝広、専門員兼指導主事　小川剛、課長補佐　河内克友

専門員　谷口塁、主査　五家さおり　教育サポートセンター　舩坂礼子

▽協議及び調整事項

第６次瀬戸市総合計画について

小中一貫教育及び小中一貫校の推進について

▽協議内容

議事に先立ち、伊藤保徳市長から開会のあいさつがなされ、第６次瀬戸市総合計画内容と平成２９年度の予算方針について説明がなされた。

その後、予定した協議及び調整事項について意見交換を行った。主な意見は、以下のとおり。

委員

健康であることが全ての基礎だと考え、今日は、健やかな体の育成についてお話をさせていただく。瀬戸市民が健康であることは、瀬戸市の財産になる。生涯に渡り元気な体で健康的な生活を送るためには、子どもの頃から運動習慣を身に着ける対策が必要であると思う。健康づくりに積極的に取り組み、市民のライフステージに合わせた生涯教育やスポーツ施設の開放等に目を向けることが必要だと思う。

例えば、学童期には、健康教育として、保健衛生面で、正しい手洗い、うがい、歯磨きの仕方やたばこの恐ろしさ、お酒の害を知り、食育としては、バランスのとれた食事をして、体重管理をすることの大切さを指導する。運動面では、体を動かすことの楽しさを教え、運動習慣を身に付け、体力づくりをする。子育て世代の３０代、４０代の方

には、忙しい中でも運動を続けられる環境を提供し、５０代以上には、健康寿命を延ばすために講座を行い、仲間づくりのできる居場所を地域と共に作っていく。
　子どもから大人まで生涯にわたって健康的に元気に楽しく過ごせるように応援する政策を沢山ＰＲすることが、瀬戸市の魅力を増すことになり、人口の増加にもつながると思う。

市長
　先程、方針のところで申し上げたが、大学との連携の中でスポーツや健康寿命の延伸というテーマで取り組んでいるが、学校教育の中で、子どもの時からの習慣をつけるということはとても大切なことだと考える。

委員
　先程、委員から健やかな体、という発言があったが、私は、ライフステージに応じた切れ目のない教育の推進など述べさせていただく。
　学校、家庭、地域が今後も安心して子育てができ、子どもたちが健やかに育つまちづくりに取り組むことに、どのように関わるのか検討してみた。より一層、より一丸となって取り組むためにはライフステージに応じた切れ目のない子育て支援が必要と考えられる。
　現在は人と人との繋がりが希薄化している。社会的孤立、貧困、虐待、引きこもりなど住民課題や、生活課題が多様化・深刻化し、地域における住民同士の支え合いがとても重要となっている。この支え合いがやがて地域の底力となり、子育て支援だけでなく地域の強い絆づくりに期待できると考えられる。
　子どもの育成と地域の底力と行政の連携について考えてみた。子育て中の母子にとっての健康課・社会福祉課との情報共有や保育園・幼稚園から小・中学校進学に向けて対応できない子どもの支援を、こども家庭課・交流学び課と一緒に協力して行うなど、部課を横断して連携し、サポートする。そして信頼される学校となるよう地域との連携を強化するコーディネーターの設置と、学校教育課の関わりも必要となる。教育相談やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーが、関係諸機関と連携できる体制づくり、このように誰もが子育てに関わる仕組みづくりこそが各家庭での子育てや教育の質を向上させることにもなり、それを情報発信することで良い方向に進んでいくことが期待される。
　子育て支援やサポートをできる人が瀬戸市には沢山いるのだという安心感ができてこそ、各家庭での教育も充実してくると思われる。その子育て支援やサポートする側には豊富な知識や経験を持つ方々と、自分のできることをできる範囲で関わる方々の両方が必要である。支援に関わりながら、生涯に渡り相互に学び合う仕組みが新たなまちづくりを活性化することにも繋がる。
　子育ては様々な人たちが関わりを持つことで、地域の子どもは地域で育てる、という取り組みになり、お互いに豊かな心の育成にもなる。地域と連携した子育て支援に行政

も目を向け、見守りながら強力なサポートをお願いしたいと思う。

市長

２９年度から総合計画がスタートする。縦割りでそれなりの効果のある政策も、もちろんありますが、限られた資源で何とか大きな効果を出そうとすると、横連携というものが庁内においても必要であり、また、ただ役所だけが行うのではなく、更に広がって、地域力推進委員会や、あるいは公民館と連携することが望ましいと考えるが、直ぐには難しい面もあるので、大いに議論をして前向きに進めたいと考えている。

委員

「安心して子育てができ、子どもが健やかに育つまち」と「今後の小中一貫校の具体的な取り組みの連携」について考えてみた。

地域で育てること、核家族、老人だけの世帯など極端な世帯の接点を見つけることが大切だと考える。職業からの例を申し上げると、神社でのお宮参りに来られる方で、おじいさん、おばあさんが一緒の方は、瀬戸の昔からの風習は１１０日と教えてくださるが、若い世代の方は電話で「インターネットを見たのですが３３日ですか？何日ですか？」と聞かれる。

つまり、年の上の方の世帯があれば、昔からの風習を教えてくださる方がいて、知恵を授けてくれていたが、今そうした環境にない方に教える人(対象)は、インターネットになってしまっている。非常に便利ではあるが、瀬戸の地域性や風習は載っていない。そうした時に知恵袋として高齢の方、昔からの瀬戸を知っている方の知識が非常に大切になってくる。

また、おじいさん、おばあさん二人だけの世帯などは非常にさびしいもので、ごはんを食べる時でも会話が進まないと思う。そこで神社でも赤ちゃんが一人いるだけで、そこにいる他のおばあさんが「ああ、かわいい」となり、そこでコミュニティが広がっていく。赤ちゃん一人がそれだけの力を持っている。

そうしたことを考えると、今、核家族、老人世帯では、全くコミュニケーションがなくなっているので、夢のようなことかもしれないが、今後は地域を大家族ととらえて、隣のお母さんに聞けば教えてくれる、隣のおばさん、おばあさんに聞き、そこで知識を得て、そこでのコミュニケーションを図る。いろいろな話ができるということで話が広がっていくと考えると、今後の一貫校は広い地域となるが、すべての方々が子どもを育てるという環境を整えるということが、一つの大きな課題ではないかと思う。地域の特色を新しい学校に持ち込んで、さらにより一層効果的な教育に活かせるということが望まれることではないかと思う。

もう一つ、子どものことで集まっていただく文章などで、保護者会と言う表現を使っている。私が子どもの頃は、父兄会、父母会などであったが、様々な家庭の環境を考えての保護者会という表現が多くなっている。父兄会と言うのは、父、兄の会つまり、戦

後、父親が戦争で亡くなり、その家庭を育てるのは母親であった、あるいは長兄であった。そうすると家庭の代表として父が来るべきところに兄が来ていた、あるいは、母親が手がいっぱいなので兄が代わりに出た。下の子どもの面倒を看る兄は、自分は学校に行かなくても、下の子どもたちを学校に行かせたという名残が、その言葉であるのではと聞いた。今の家庭は戦後とは違う形で様々な家庭環境がある。そうなると、保護者と言うのは、本当にその子たちを直接育てている、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんだけではなく、地域全体が保護者と言う考え方に基づいて会を催すということも今後は必要ではないかと思う。

いづれにしても、「地域で育てる瀬戸の子ども」というテーマが、小中一貫校の根底であるということを求めたいと思う。

市長

大変スケールの大きい話ではありますが、歩みを止めていてはいけないと思う。我々が地域に踏み出していくことが重要であると思う。

委員

先日、学校訪問でお邪魔した学校で校長先生から、瀬戸市のキャリア教育は来年度で、13 年目を迎えると伺った。県内でもトップレベルの実績を持っている事業だと思う。その中で瀬戸市内のいろいろな企業を見ていくと、ＣＳＲの活動に積極的に関わっている企業があったり、産業であるやきものに関わっている事業所があったり、瀬戸の郷土料理を出したり、瀬戸豚を出したりする事業所がある。広い分野でキャリア教育を実施できる事業先があるので、新しくできる学校では、レベルをひとつあげたキャリア教育を推進することで、子どもたちに郷土愛、人づくりの基礎を作っていただきたいと思う。

小学校 1 年生から英語教育が始まっていく。今、現状で英語を習わせようと思うと事業として英語をやっているところに預けることになると思うが、英語教育とキャリア教育を合わせてスケールの大きいものを考えられると良い。英語の勉強はできるが、子どもたちが自分の意見を発言したりするのは日本人はなかなかできないので、ＩＣＴの活用などを考えると、今後、海外の先生とライブでやり取りができたりするのは、子どもの頃からやっていくのが必要かと思う。

キミチャレについて調べると、去年は 29 組 39 名で、一昨年は 38 組 54 名のチャレンジャーがいた。非常にいい事業だと思う。そうしたものを自分の子どもにも受けさせたいと思うが、今は小学校 4 年生から中学校３年生となっている。それには理由があってその期間を設けていると思うが、プレキミチャレと言うような低学年の子どもたちにも、もう少しやわらかい感じで取り組めるキミチャレがあると良い。今は、「モノ」消費から「コト」消費に関心が移っていると思う。知識や経験は誰にも取られないものなので、子どもの頃から、いろいろな経験をしていことは「自ら考え、学び、生き抜く力」の醸成につながるのではないかと思う。

市長

キャリア教育の概念は広いが、13 年目を迎え小学校１、2 年生にそうしたことがやれるという実例が既にある。1 年生の子は新しく入学する子どもの運動会や、例えば、行事の飾りの帽子を作ってあげるとかを工作の時間で行っている。1 年生から 6 年生までカリキュラムでやっているような学校もあるので、もう少し視野を広げて考えても良いと思う。

委員

教育関連の予算につきましても、資料にありますようにご配慮いただき、また、小中一貫施設整備基本構想もまとまり、委員ともども感謝しております。

一貫校と防災について、教育とは少し違った視点で考えてみた。一貫校は災害拠点になりうるか。跡地利用は重要なことになってくるのではないかと思う。跡地が、有力な拠点になることを願うと同時に、建物や道やインフラ的に整備されていないと、そもそもそこに行けないということになってしまうと本末転倒である。やはり、災害時には、教育部門だけでなく、部署を超えた横断的な教育が大事だと思うので、みんなで協働でやれるような形がとられると良い。

災害というと、風水害、地震など大きく報じられるが、最近の事例で、大火事と言うものが出てきた。瀬戸市も木造住宅が多い。そうした地域は高齢者も多いので、訓練の在り方も含めアクセスなども考えると非常に心配だと思う。子どもたちだけでなく大きなところで災害について安心安全な教育環境を整備していかなければいけないと実感した。中心部では、パルティせとに行けば、瀬戸蔵に行けば何とかなるといった具合に心強い災害拠点、一貫校もそうだが、そんな地域ができると良いと思う。

市長

欠かしてはいけないことの一つであると考えている。

委員

瀬戸市小中一貫校施設整備委員会に教育委員として参画しているが、１年間を振り返ってみると、地域でいろいろな説明会を行ったり、部会を立ち上げたり、ワークショップを開催したり、アンケートを実施したり、地域での地区協議会を立ち上げたりするなど、市長始め、市長部局及び教育委員会の方々といろいろ取り組み、大きく前進したと思っている。先週の委員会の際にも、後日総合教育会議があるので、引き続き頑張っていくことをお伝えしますと発言した。

私は、瀬戸らしい教育、小中一貫教育、小中一貫校の関連で環境教育というものをイメージとして持っているのでそれをお伝えしたい。

狙いの一つは子どもたちがより遊ぶようなことができて、いろいろなことが体験できるような形、ゲームにはまり、外に出ないようなことにならないような学校にしていきたい。

環境教育というと大げさだが、瀬戸市は愛知万博が行われた場所であり、自然の叡智として、環境万博と言われたことを何らかの形で子どもたちの教育に活かしていければと考えている。自然や環境の側面において、小学校１年生から中学校３年生まで何らかの形で関われると考える。例えば、小学校３年生と中学校１年生がほぼ同じような土俵の上で話ができることを活かし、９年間を通した環境教育を、キャリア教育、瀬戸学、郷土学習と併せて大きな柱にしていくと良いと考える。それを感じたのは、古瀬戸の紺屋田川の水質調査隊である。小学校３年生位から調査を行い、４年生になると少しレベルアップし、小学校６年生になると、浄化のための装置を配置することを行っている。こうした経験をすると子どもは、将来、自分は絶対川にゴミを投げるようなことはしません、というような発言をする。感性豊かな子どもたちが、良い悪いをしっかりと認識できる場として、環境という機会をとらえることは重要である。これは異学年でも行うことができ、地域の方も関わりが持てる。

自分が幼い頃、近くには東大演習林があったが、そもそも演習林というのは、陶磁器産業との兼ね合いの中で禿山になったところを植林した経緯がある。モノを作るときは松の木を燃やさなければならないなど、いろいろ繋がっているということを理解しながら環境について学んだ。

小学校の段階から環境教育は行われているが、こうしたことを体系的に横断的に取り組んでいけば面白い教育ができるのではないかと考える。

また、光陵中学では学区のゴミ拾いにより美化活動を行っている。こうした取り組みを例として、「美しいまち、せと」を作るために、テーマとして小中一貫校でも取り組んでいったらどうか。

市長

おおいに盛り込んでいきたい。

それでは一通りご発言をいただいたので、委員それぞれの意見を踏まえて、教育長からご発言いただきたい。

教育長

教育長という立場で、学校、地域、保護者、それぞれの視点でお話しさせていただきたい。

先程から瀬戸らしい教育という言葉が出ており、最近、議会の方からも「瀬戸らしい教育とはなんですか」と質問を受けるが、「瀬戸らしい教育」というものは、教育アクションプランそのものであるとお答えするようにしている。そこには様々な事業展開があって、それが集合体として、瀬戸らしい教育を作り上げていると思っている。

さらに、今回、第６次総合計画の都市像の一つが「子ども・子育て」に関することとされ、教育アクションプランと第６次総合計画の都市像が、がっぷり組み合い、骨太の政策になってきたのではないかと考えている。

これまでも瀬戸市は様々な特徴的な、例えば、キャリア教育、特別支援教育、環境教

育等の様々な実績があるが、今回は更にもう一歩上に上がるということで、小中一貫校の新設が位置付けられていると考えている。そして中心部だけではなくて、市内全学校を取り込んでいくこれからの小中一貫教育とういことも、これまでの教育施策を凌ぐ大きな瀬戸らしい教育の実現になると考えている。今、市長が考えておられる政策、今、各教育委員さんから提案いただいた様々な具体的な意見に取り組みながら、今回の学校のモデル、これは市内のモデルでもあり、大きく考えると日本の学校のモデルになっていくというそんな思いで、準備を進めていきたいと思っている。

それから、施設に目が行きがちであるが、それと同時に最も大事なこととして、一貫校建設と同時に取り組んでいるのは、子どもたちにいかにしっかりとした教育を行うかということにつきると思う。

このところ、特に校長会や各会議、そして、昨日も若手の先生達約１００名余りの研修会で、再三話をしていることは、器に見合うようなことをしていきたい。これは何かというと、指導力を身に着けるということ。それから、学級経営力を高めるということ。それから人と関わる変わる力を身に付けること。これを先生達にお願いをしている。平成３２年の開校までの３年間で、相当こうしたことのレベルを上げていかないと、見合ったものにならない。これからは、機会あるごとにこのことを訴えていきたい。今、それぞれの先生達のチームで、来年度以降に進めようという動きも出てきている。

今回の一貫校というものがどういう機会であるかというと、先生の質を高めるということは、子どもたち自身の力をつけていくということになり、さらに、保護者の皆さんや、地域の皆さんの信頼や協働というものを得ていくという、すごく大きな力になるということを確信している。今、様々心配事をお持ちの方もあるが、開校に向けて、また、その開校してからも充実に向けて、瀬戸市、瀬戸市教育委員会がその務めをしっかり果たしていきたいと思う。小中一貫の実現に対しては私もそうだが、市長の思いはそれ以上に強固なものがあると私は理解しているので、是非実現に向けて頑張りたいと思っている。

市長

他にご発言があればお伺いしたい。

委員

新任教育委員であるが、総合教育会議を始めとしていろいろなことが駆け足の状態で進んでいるという印象を受ける。小中一貫校の件に関しても現場をけん引していく市役所の方、携わっている方にとっては、その内容を吟味されているとは思うが、逆に受ける側にとっては、まだついていけていないといった声も地域から聞いている。

目指すところは、より良い子ども達の未来を見据えた教育環境ということに変わりはないと思う。様々なワークショップ等見学させていただき、とても熱心に取り組まれているようだが、そうしたところをもう少しきめ細かに地域住民の方、ＰＴＡの方への説明をしていただき、言っていることが届くような説明で、目指すところを同じにして進めていくことが、望ましいのではないかと自分自身でも改めて感じたところである。

市長

いろいろ意見を頂戴した。目指すところは瀬戸の次世代を担う子どもたちが健やかに育ち良質な教育を受けて、立派な大人になってもらうということ。それは地域を挙げて我こそが保護者だという思いの中で育てていくという精神的なものと、それをハードの上で実現していく小中一貫校でありたいと思う。その中にアクションプランや瀬戸固有の歴史、文化、自然をフルに活用して豊かな感性を持った大人になってもらいたい。

この願いは一緒であると思っているので地域の皆様としっかりと話し合いをさせていただきながら進めていきたいと考えている。